



ロケーションに素直に、東面に開いた大開口が雪原の景色を切り取る。快適な室内から日常的に雄大な自然の眺望を楽しめるのは、この地域ならではの豊かさだ。春には田んぼの先に桜並木を一望できる。大開口は既製品のFIX窓5窓と引き違い窓1窓によって構成しており、コストにも配慮している



玄関を入るとすぐに使いやすい4畳半程度の広さのある土間があり、そのまま吹き抜けのLDKへと続いている。断熱等級7、3m耐雪の高い躯体性能がフルオープンの開放的な空間構成を支えている



雪に覆われ、冬の日射量も十分に期待できないエリアでは、GX住宅であっても太陽光発電ありきが“絶対解”ではない。家づくりを通じて、地域ならではの暮らしの豊かさを模索し、計画に落とし込む



シンプルで飽きの来ない長く住み継げる家づくりを体現した空間。同社の顧客は、性能よりは自然素材を活用したデザイン性や世界観に魅力を感じる人が多い

大恭建興の住宅は、UA値0.22～0.26W/m²K（断熱等級6～7）、積雪1m想定許容応力度計算による耐震等級3を標準仕様とする。GX志向型住宅の基準および補助金制度について、同社専務の小幡大樹さんは「多雪区域では太陽光発電が必須要件ではないため、仕様をアップグレードすることなく補助金を活用できる」と話す。2025年は新築17棟のうち、国の予算枠内で申請が間に合った9棟で補助金を活用した。

同社の施工エリアは省エネ基準の地域区分で4・5地域にまたがる。5地域では特別な対応をせずとも基準を満たす一方、4地域ではGX住宅の要件であるBEI0.65を達成するために「多少の工夫が必要になる」（小幡さん）と

いう。これについて設計担当の佐藤光さんは、「照明のセンサー化や、トイレのタッチレス水洗、手元止水が可能なシャワーの採用といった対応でクリアしている」と説明する。給湯器やエアコンについては、高価な高効率機種を採用せずとも普及品で要件を満たせるため、「大きなコストアップを伴わずに対応できている」とする。

商圏とする長岡・小千谷周辺では、敷地条件から自然落雪が難しいケースも少なくない。その場合、屋根の上に雪を載せたまま冬のシーズン（3～4カ月）を越すことになり、屋根上の太陽光パネルはその間ほとんど発電しない。一方で、構造的には積雪荷重への配慮が欠かせない。こうした地域特性

を踏まえ、「創エネありき」で考えるのではなく、高性能な躯体によって厳しい気候条件をハンデにしないことを優先する同社の判断は、暮らしに寄り添う極めて地域合理的な選択と言える。

設計思想においても、小幡さん、佐藤さんともに近年、「南側に大開口」というパッシブデザインの定型が、このエリアでは必ずしも“絶対解”ではないと考えるようになった。冬季の日射量が少なく、南面大開口の効果が太平洋側など他地域ほど期待できない場合も多いからだ。

一方で、高性能な躯体があるからこそ、開口部の向きや大きさを、山並みや田園風景といった身近に広がるロケーションに委ねる設計が可能にな

る。たとえば、雪に覆われ外との直接的な行き来が制限される冬でも、暖かい室内から美しい雪景色を“借景”として楽しむことができるなど、外に身を置かなくても外部環境の豊かさを日常的に享受できる住まい——それこそが、雪国における高性能住宅の一つの答えではないかと考えるようになったという。

こうした思想のもと、同社が近年意識しているのが、「外と物理的につながらなくても、魅力的な建築は成立する」という発想の転換だ。リビング南側の開口部からテラス、ウッドデッキ、庭へとアクティブにつながる暮らし方だけが正解ではない。たとえ開閉できない小さなFIX窓であっても、庭の緑や

周囲の景色が美しく切り取られていれば、そこから得られる豊かさは十分にある。

直近で引き渡された小千谷市内の平屋住宅は、そうした考え方を体現した一例だ。3m耐雪仕様の構造を前提としながら、ロケーションに素直に敷地条件を読み解いて建物配置を決め、東側に大開口を設けた。今は雪原を一望し、春になれば田園越しの桜並木を切り取る。パッシブデザインの原理原則よりも、「この場所だからこそ得られる豊かさ」を優先したプランニングだ。

この大開口は、構造、コスト、意匠のバランスに配慮し、既製品のFIX窓を5窓、同サイズの引き違い窓を1窓組み合わせで構成。佐藤さんは「最

近く用いている手法で、吹き抜けのLDKにおいて掃き出し窓は使わず、床から上げた位置に1階の窓を設け、吹き抜け上部の窓と近づけることで大きな開口をつくる。内と外を物理的につなぐのではなく、美しい景色を最大限に取り込むための設計」と説明する。

小幡さんは「高性能住宅は、性能値そのものを競う時代はすでに終わっている」と考える。一方で高い躯体性能を根拠に、気象条件が厳しいエリアにおいてもプランの自由度は広がっている。今後も、住宅性能に気候・風土など地域固有の条件を重ねて、豊かな暮らし方を導き出す“翻訳力”を高めながら、地域のつくり手としての存在感を発揮していく考えだ。